

江戸期以降は、たとえば、檀家制度の定着や明治以降の教育分野へのキリスト教の進出など、現代人とのつながりという点ではより身近に感じられる側面も少なくない。このように、現代にも連続する宗教という観点から、近世、近代の仏教に対しても学生の関心を惹起するべく務めている。

四 学生の信仰に配慮すること

客観的に日本宗教史を講ずるように心がけていても、宗教史を担当する教員は特定の宗教とかかわりの深い人も多く、教員個人の信仰と客観的な授業内容とは、常に緊張関係にあると思われる。また、学生の信仰様態も多様であり、この点、十分な配慮が必要である。特に、専門的な授業の場合には、かなり丁寧に説明することが可能であるため誤解も少ないであろうが、概論的な宗教史の場合、個別の宗教事象についてそれほど長い時間を割くことはできないため、簡潔な表現を心がけるあまり、誤解を招く場面もあるように感じられる。いよいよ慎重な配慮が必要であろう。

「日本宗教史」の教え方

——特に一神教の論じ方と関連して——

小原 克博

日本宗教史を教える科目として宗教学5「日本文化の中の宗教——古代からグローバル時代に至る宗教のポリテクス」(全学部向け)を担当している。最初にシラバスの一部を紹介

し、次に、この授業の特徴点を述べる。

シラバスより抜粋。「この授業では、日本宗教の成り立ちやその基本的な思想・世界観を学びます。その際、古代世界からグローバル世界までを時代背景として、日本宗教が文化や政治とどのような相互関係にあったのかを考えていきます。(中略)この授業では伝統的な日本宗教として、神道、仏教、儒教、道教、民俗宗教を取り上げます。仏教、儒教、道教は中国・朝鮮半島経由で日本に入ってきた外来宗教ですが、それ以前にあった日本の土着の伝統と相互に影響を及ぼし合いながら、日本宗教の多様性と一体性を形成してきました。また、古代世界の頃から、宗教は共同体や社会と深い関係を持っています。仏教が国教的役割を果たした時代もありました。宗教の教えの側面だけでなく、宗教のポリテクスについても、この授業では重点的に扱っていきます。

明治期以降、日本社会は欧米の視線を強く意識することになり、それは日本宗教にも大きな影響をもたらしました。キリシタン弾圧以降、キリスト教との再度の接触も、この時期に本格的に始まります。この授業では、日本宗教を一国史の中で自閉的に語るのではなく、世界史的な比較の視点を導入していきます。キリスト教をはじめとする一神教の伝統は、日本宗教とはかなり異なる性格を持っています。しかし、そうした一神教の歴史観や自然観をも視野に入れることによって、日本文化に根ざした歴史観や自然観を、より客観的に見ることができるようになります。この授業では、そうした比較宗教学視点を通じて、そもそも「宗教」とは何なのか、ということについても理

解を深め、グローバル社会における日本宗教の語り方を考えていきます。(後略)」

以上のような講義を担当する中で、次の点に配慮しており、これらの点がこの講義の特徴にもなっている。

一、宗教は「怪しい」「危ない」「理解不能」といった先入観をできるだけ取り除く(アニメ・マンガの利用)。

二、身近な神社仏閣を訪ねてみたくなるようなインセンティブを与える。

三、世界的・アジア史的な文脈の中で、日本宗教の特徴を理解する。特に、一神教との比較を行うことによって、諸宗教に対する単純な優劣意識(「一神教」対「多神教」など)を持たないようにすると同時に、宗教の普遍性やグローバルな課題にも目を向ける。

四、国外で活動している日本宗教(仏教や新宗教)の実情や課題を紹介し、国際社会における日本宗教の役割を考える。

五、海外で日本宗教を英語で説明できるように、講義におけるキーワードは日英を並記する。

六、日本宗教を教えや儀礼の側面からのみとらえるのではなく、文化や政治力学(宗教と国家、宗教と戦争、政教分離等)との関係の中で理解する。

七、留学生に対しては、彼ら・彼女らの宗教的背景を考慮し、また、それとの比較を通じて、日本宗教や日本人の宗教観について説明する。

小原克博 On-Line (<http://www.koharac.ac.jp/education>) の項目に授業資料あり。

「日本宗教史」の教え方

——特に中国宗教の論じ方と関連して——

菊地 章太

宗教がどれほど広範な文化事象とつながっているか。教養教育において宗教にかかわる講義を準備するとき、ひとつの課題としてこのことを考えてみたいと思う。

宗教は高度な思想と体系的な教義を備えているが、同時に卑俗で雑駁な面も持ちあわせている。庶民の日常に密着した部分は、広くて深いものがあるにちがいない。中国では儒教も道教も、ともに人々の宗教的心性や宗教感情のなかに浸透してきた。道教は教団の宗教としては日本に伝わっていないが、それにかかわるもろもろの習俗は日本に伝わって、私たちの生活に根づいている。その一例として庚申信仰を取りあげたい。

私たちの体にはいろいろな虫がいる。ふさぎの虫、昼寝の虫、虫のいどころが悪い虫、虫が知らせる虫、等々。瘡の虫もある。赤ちゃんの夜泣きの原因とされる。どれも実体があるわけではない。いるはずのない虫なのに、心も体も支配されている。その典型が三尸の虫である。

四世紀に書かれた『抱朴子』によれば、体のなかに三尸の虫は、人が早死にするのを望むという。庚申の日に、人の寿命をつかさどる司命の神にその人の悪事を告げにく。長生きがしたければ、その日に眠ってはいけない。三尸が体から出られないよう見張りをする。これを守庚申と呼んだ。この習俗はや